

## A-2. “虫だって命がひとつだよ” 若松幼稚園（福岡県北九州市） 〈4歳児 9月～10月〉

自然と共生し人と人のかかわりの中で、子どもから気付き、感動し、発見する喜びをもたせていくことを大事にしていくこと。そして、解決策を求めるのではなく、子ども同士や教師とのかかわりの中で、遊びを通して試行錯誤しながら発見していく活動の過程を大事にしていくこと、そうした経験が「子どもの科学する心の芽生え」を育てていく要因となるととらえている。

### 学級の実態（虫への関心から）

- ❑ 一学期の幼児たちは、園庭で見つけたオカダンゴムシの動きに関心をもち、じっと見つめていた。自分の手が触れると動いていたオカダンゴムシが丸くなることへの不思議さや面白さを感じていた。学級の観察ケースで飼うようにしていくなかで、オカダンゴムシの抜け殻に驚き、図鑑を見たり調べたりする姿が見られるようになってきた。
- ❑ 9月の園外保育では、オンブバッタやコオロギ、カマキリとの出会いがあり、虫に興味をもっている男児は、真剣な表情で、自分でみつけることの楽しさを味わっていた。特に、「強いカマキリを見つけない」という思いが表れていた。半面、触ることが苦手な幼児たちは、教師と一緒に虫見つけをしながら、“僕の虫・私の虫”として観察ケースに入れて喜ぶ姿が見られた。

### カマキリとバッタの命って？

幼児の思いや考えのとらえ ● 疑問 ● 気付き・試し	幼児の活動	教師の援助
<div style="text-align: center;">  </div> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;"> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 50%; width: 150px; height: 100px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center; background-color: #e0e0e0;"> <p style="margin: 0;">どうしてバッタを 食べさせるの？</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin: 5px 0;">↓</div> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 50%; width: 150px; height: 100px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center; background-color: #c0e0c0;"> <p style="margin: 0;">カマキリは、 生きた虫を食べるんだ</p> </div> </div>	<p>O男が、家の近くで捕まえたカマキリを持ってくる。</p> <p>O男 「わあー大きいね」「カマキリは強いんよね」</p> <p>H男 「そうよ」</p> <p>O男 「先生、カマキリは、バッタが餌なんだよ」</p> <p>園庭でバッタを捕まえ、カマキリの観察ケースに入れようとする...</p> <p>H子 「バッタをいれたらかわいそうよ。やめて」</p> <p>H男 「いいんだよ」「カマキリは、バッタを食べるんだよ」</p> <p>H子 「[先生が、「命は一つしかないから大事にしましょう」ってこの前言ったよ」</p> <p>H男 「でも、カマキリが何も食べなかったら死ぬんだよ」</p> <p>H子 「バッタだって食べられたらかわいそうよね」と周りの友達に同意を求める。</p> <p>しかし、H男は、捕ってきたバッタを観察ケースの中に入れる。</p> <p>降園準備をしていると、カマキリが暴れ</p>	<p>T 「大きなカマキリだね」「どこにいたの?」「お友達に見せたらびっくりするよ」</p> <p>T 友達同士で知っていることやかんじたことを話している姿を温かく見守る。</p> <p>T 「O君が自分で捕まえたってよ」「すごいね」</p> <p>「O君ってよく知ってるね」 (環)カマキリの図鑑を準備しておく。</p> <p>T 幼児が、互いに自分なりの考えを言い合う姿を見守る。</p> <p>T 幼児がそれぞれの立場にたって考えている姿を認める。学級全員の幼児にも二人の幼児の気持ちを知らせ、どうしたら よいか、投げかける。同時に、自分たちの生活を具体例で取り上げて話し合ったりカマキリが生きた図鑑を見せたりする。</p>

幼児の思いや考えのとらえ	幼児の活動	教師の援助
<p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">バッタが食べられると かわいそう</p>	<p>だし、バッタの頭を残して胴体のみを食べていたことに気付く。</p> <p>O男 「バッタが食べられたみたい」「でも、顔は残っているね」 Y男 「カマキリは、バッタの体しか食べないんだよ」「顔は食べないんだよ」と遊びに来ていた年長児Y男が回りの4歳児に教える。</p> <p>年長児の話聞いていた学級の幼児たちは、啞然としていた。観察ケースを抱えてじっと見ていた。</p>	<p>T 「さすが年長組さんは、何でも知ってるね」 T 虫のことに詳しい年長児への憧れや刺激を受けていけるような場の雰囲気を作る。 T 生きた虫を食べた残酷さを目の当たりにして、ショックが大きかった4歳児の幼児たちの思いを受け止める。</p>
<p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">どうしてカマキリは、 バッタを見て 暴れだしたのかな？</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">僕たちがえさをやらないと 死んでしまうよね。</p>	<p>2～3日後、H男がカマキリの餌として、バッタやカナブンの家から持ってきた。が、しかし、バッタをめがけてカマキリが暴れだした姿を見た瞬間に、バッタ側の気持ちになり、慌てて取り出して持って帰る。</p> <p>翌日、ビデオを見た幼児たちは、「虫は、みんな命があるんよね」「大事にしないといけないね」「ご飯を食べさせてあげないとかわいそうよ」など、それぞれの思いを呟いていた。</p> <p>O男 「逃がしたくない」「カマキリが死なないように、僕が餌を持ってくるね」</p>	<p>T カマキリへの思いと、バッタやカナブンなど、家から持ってきた虫への思いが揺れ動いているこの時に、人権教育啓発ビデオ「どんぐりの森」を見せ、命はひとつであることを知らせる。</p> <p>T カマキリの気持ちを代弁すると同時に、弱っていくとかわいそうなので、広い草むらに逃がしてあげることの大切さを知らせる。</p>

**考 察**

カマキリ側にたつ幼児とバッタ側にたつ幼児の思いの違いがとらえられ、幼児たちは、感情体験を味わうことができたようだ。生きた虫を食べる残酷さを感じた幼児たちにとって、生きるための必要不可欠な条件を理解させることは難しいことであった。自分が見つけた虫への愛着と逃がしたくない思いを強くもっているこの時期の幼児たちに、ビデオを視聴させたことで、どの虫にも命がひとつしかないことや弱ってきた虫の思いにも気付くきっかけとなった。

**ポ イ ン ト**

「命」という難しいテーマですが、カマキリやバッタそれぞれの立場にたって考えている子どもの姿を認めながら、保育者が命に対する思いをクラス全体で深めています。子どもがそれぞれの立場を想像しながら葛藤し、思いを互いに話し合いながら、自分たちなりに受け止めていく様子が伝わります。